随想

西口逮捕の感激

稲留　確

西口逮捕は、そのことに精魂を打ち込んで来た熊本県警察として、よろこびを隠しきれないものがあります。協力者である古川さん一家には警察庁長官協力章が、玉名署にも長官表彰が与えられ、更に県議会からは県警全体に感謝状が贈られました。

かくて、熊本県警察官に対する県民の挨拶は「今日は」から「西口逮捕おめでとう」に変ってしまった。

私も、警察生活二十年を越しましたが、この西口逮捕ほど、県民をまた全国民をわきたたせたものを経験したことはありません。

世の中は面白いもので、威力とはこんなことを言うのでありましょうか、西口逮捕後、引き逃げなどの極悪犯が、自ら出てくるような恰好で、解決されるのであります。

本当に有難くなってくるのであります。

×

「広報くまもと」から〃本部長の御感想は？〃という御尋ねでありますが、私としましては、ただ〃大満足〃が卒直な御答えであります。

逮捕成功の第一の要因は、勿論古川さん一家の届出であります。やゝもすると、警察への連絡が途切れがちになる昨今、この届出は感涙を禁じ得ないものであります。

次に、部内のことを、私の口から申し上げて申訳もありませんが、届出を受けた木場巡査夫人の処置も適切でありました。

〃内緒に、内緒に〃との届出でありましたので、軽い気持で、ご主人の宿直明けの帰りでも待っていたら大変なことでした。間髪を入れず本署の木場巡査に連絡し、引き続き病臥発熱の身にもかかわらず、懇切な措置応待を果しましたことは、警察の俊敏入念な活動を導き出したものであります。

玉名署もよく頑張ってくれました。専門的に見て、沈着でした。

そして最後に、県民の皆さんに、御報告する光栄に浴したいのは、本県警察が、西口捜査に関して示した事前措置の徹底さであります。

×

昨年十月二十日、福岡県警から、最初の手配を受けたその時から、本県警察は「西口」に異常な緊張を示したのであります。どの警察も、日夜多忙で、他県の事件には熱意も二次的になりがちですが、感ずるところあって、私は、当初から「西口」に真剣に取組んだのであります。①玉名、山鹿外重要署の指定②直接指揮③幹部の率先活動④特別班の設置と捜査日誌作成⑤手配写真増刷⑥動員と措置の徹底による公開捜査の滲透など、文字通り本県警察の網は「西口」を待ち伏せたのであります。

特に、十二月三十日の警察庁計画の全国一斉捜査における本県警察の力の入れようは、未曽有のものでありました。本部の全部課長をも総動員しての、もののしいものでありました。

私は、警察庁の計画は、必らずその効果をあらわして、西口を狩り出すに違いないと判断し、その動きに一定の想定を試み、更に本県に来るものとすれば、玉名を重要視すべきものと断定し、全県下の総指揮を、本部長室に非ずして、玉名署において、采配したのであります。

従って、玉名署に対しては、微に入り細をうがって指導したのであります。

その甲斐あってと申してはなりませんが、〃人事を尽して天命が恵まれた〃との想いは、全県警官の胸にあるのであります。

協力者の方々に深甚の感謝を捧げますと共に、〃頑張れば、必ず報いられるのだ〃との確信と自負を禁じ得ないものがあります。

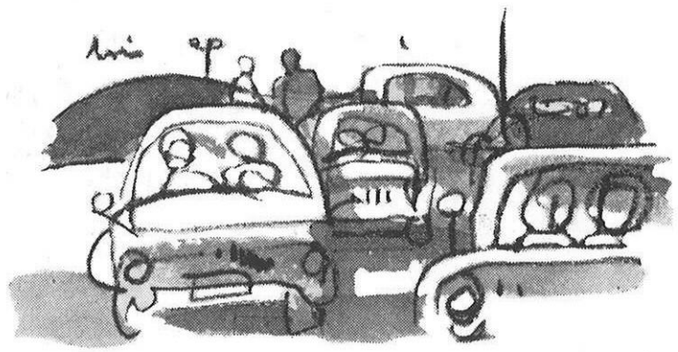
×

最後に県議会の感謝状を読みなおして感激を反芻致したいと思います。即ち、

「貴警察は、昭和三九年一月三日玉名市において稀代の凶悪犯全国指名手配被疑者　西口彰を逮捕し全国民の不安と恐怖を一掃されたことは、事前における周密な警察措置と届出受理後直ちに開始された沈着巧妙な活動によるもので、さらにその根基を尋ねれば貴警察平素における国民保護の使命感の充実、規律の振粛並に合理的運営に起因するものに外なりません。

ここに県議会は県民を代表し感謝の意を表します。」

（前熊本県警察本部長）



悪戦苦闘の記

楠田主計

この年になって、というといかにも老人めいて聞こえるかも知れないが、自動車の免許を思いたって、やっと宿願を達して見ると、わが身の不調法加減さがつくづく思い知らされた。

北海道大学の某碩学が「少年時代から試験という試験は、みんないっぺんで通ったが、車だけは唯一の例外だった。こればかりはどうにもこうにも思うようにならなかった」と述懐したという話をきいたことがあるが、試験も相当にすべった自分だが、車はそれ以上にやっかいだった。

女房にいたっては「玄関の活け花がかわっても見えないあなたに路上の障害物がハッキリ見えますか」（とぬかす）「キレイな女の人の顔なら五十尭はなれても見える貴方ですもの、ワキ見運転で事故を起こすことは絶対まちがいないワ」と（も）ぬかしやがる。あまつさえ子供たちまでバカにする。「パパはなぜ早く免許とらないの」。取ろうと思えばいつでもくれるものとでも思っているらしい。

考えて見ると子供とドライブの約束をしてからもう相当の月日がたっている。それだけに勝利（？）の日の喜びはまたそれだけにひとしおだった。道行く車が縁遠いものだったきのうとは打って変わって、流れるように街をゆく車がみんな自分のものに思えて、何もいえない征服感がわき上がってくる。

×

同級六人、うち二人が最後の卒業検定に落ちた。その一人、六十三才になる魚屋のオヤジさんは、「三月からは商売の忙しくなるしと、もう一月やらねばならぬ補習の時間ぐりをしきりに気にしていた。月にいっぺんしかない検定をのがすとまた一カ月待たねばならぬ。もちろんその内に二時間の単位もとらねばならぬ。まるでしょうじょうが酒をのんだような格好で、ハンドルにしがみついていた親爺さんの顔を思い出す。「ババアが笑うとですタイ、もうやめなっせて」合格発表の日にさびしそうに笑いにまぎらすオヤジさんは無類の好人物、ロベタで話す言葉さえ、アクセルとクラッチをまちがえる。これでは実際の運転のときまちがえるのも無理はない。

最年少は清和村からわざわざ自動車勉強のために熊本にきているという十八才の少年。うちは農家だが耕うん機をあやつるにも免許がなくてはと、大江町の下宿屋にはいって昼はブラブラしていて夜だけ学校にかよっていた。いかにも田舎の少年らしい純情さがみんなに愛され、話しかけると直立不動で答える。まるで学校の先生の前にかしこまる中学生を思わせる純情さで、その上憶えの早いのはやっぱり十代の若さだった。

気の毒だったのは二十五才の電機販売店の店員A君だった。仮検定でも七十点以上のたしかな腕を持ちながら、試験当日、車庫入れのコースをまちがえ、バックすればいいところを、あがりにあがって先へ出てしまい、あたら好成績での最後のしめくくりまで行って、検定不能の烙印をおされて落第。きけば自動車学校の費用も全部会社もちで派遣されているそうで、毎朝支店長が朝礼の席で、A君の成績披ろうをやって他の店員たちをはげましてきた由。いよいよ及第できぬと宣言された日のA君の顔は苦渋にゆがんで、〃これでは会社に帰れない〃と泣き出す光景は、人びとの同情を集めていた。

もう一人中年の建築会社工員さんは、講習一週間目に次男が誕生、奥さんを病院にはこび込んだり、子供の食事の世話をすましたりしてかけつけていたが、毎日毎日遅刻の連続。とうとう無理がたたって流感にたおれ、大事な時間を十日間もやすんでしまった。受持の教官も最後の検定までとても不可能だろうとなげいていたが、案に相違してガムシャラなガンバリにもの言わせてとうとう無事にゴールイン、投げていた先生を狂喜させる一幕もあった。

ホタルの光もない卒業式だったが、魚屋さんも、センベイ屋さんも、店員さんも、工員さんも、みんな元気にそれぞれの職場で働きつづけていることだろう。ボーヤボーヤと可愛がられた純情少年君も、「よかったネー」と野良仕事の両親に肩をたたかれて、ひさしぶり澄み切った矢部の空気を思う存分吸い込んでいることだろう。

試験に落ちた七十一才のお医者さんが〃おめでとう、おめでとう〃と私の手をにぎって喜んでくれた日の感激を私は永久に忘れまいと思っている。

（熊本放送調査部長）